

『論語』 里仁篇編集考

村山 敬三

はじめに

おびただしい数の注釋や論考が存在する『論語』において、各篇の編集がどのように行われているかという問題について考察したものは意外に少ない。各篇においては同類の章のかたまりが見られるものの、「その配列の順序には格別の意味のないのが一般である。」^(一) というのが古來から現在までの大體の理解であり、各篇の編集のあり方についてはあまり議論の對象にはなつて來なかつたようである。

筆者がこの問題を取り上げることになつたのは、江戸後期の儒者、藍澤南城の「論語私説」^(二) について拙稿をまとめたことがその契機となつている。南城はこの著作の中で、たびたび編者の意圖について觸れ、『論語』の各章の解釋に當たつてはその前後の章とのつながりを考えよと述べていたのである。^(三)

『論語』二十篇の中で、筆者はここにその第四に位置する里仁篇を取り上げた。それは單に、二十篇に對する考察の結果、最初に篇の全體についてまとまつた理解が得られたのがこの篇だつたからである。

一 里仁篇の構造く木村英一氏の見解く

里仁篇の全體は、最後の一章を除き、他のすべての章が「子曰」で始まっている。このような整然とした形態を持つのは『論語』の中で里仁篇だけである。この篇について武内義雄は「篇末にはいろいろな言葉が無秩序に羅列せられているが、その前半はことごとく仁の説明である」と述べている。

木村英一氏の『論語と孔子』「第二篇 論語の成立」は、崔述や武内義雄の説を踏まえた上で『論語』各篇の構造や編集の問題を詳論している。まず木村氏の分析に従って里仁篇の本文を示そう。

【前半】

a

- 1 子曰、里仁爲美。擇不處仁、焉得知。
- 2 子曰、不仁者不可以久處約、不可以長處樂。仁者安仁、知者利仁。
- 3 子曰、唯仁者能好人、能惡人。
- 4 子曰、苟志於仁矣、無惡也。
- 5 子曰、富與貴、是人之所以欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所以惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。
- 6 子曰、我未見好仁者、惡不仁者。好仁者、無以尚之。惡不仁者、其爲仁矣、不使不仁者加乎其身。有能一

日用其力於仁矣乎。我未見力不足者。蓋有之矣、我未之見也。

7 子曰、人之過也、各於其黨。觀過斯知仁矣。

b

8 子曰、朝聞道、夕死可矣。

9 子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

c

10 子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比。

11 子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。

d

12 子曰、放於利而行、多怨。

13 子曰、能以禮讓爲國乎。何有。不能以禮讓爲國、如禮何。

14 子曰、不患無位、患所以立。不患莫己知、求爲可知也。

【後半】

e

15 子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。

16 子曰、君子喻於義、小人喻於利。

17 子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也。

18 子曰、事父母幾諫、見志不從、又敬不違、勞而不怨。

19 子曰、父母在、不遠遊、遊必有方。

20 子曰、三年無改於父之道、可謂孝矣。

21 子曰、父母之年、不可不知也。一則以喜、一則以懼。

22 子曰、古者言之不出、恥躬之不逮也。

23 子曰、以約失之者鮮矣。

24 子曰、君子欲訥於言而敏於行。

25 子曰、德不孤、必有鄰。

【付録】

26 子遊曰、事君數、斯辱矣。朋友數、斯疏矣。

木村氏は里仁篇の構造について、「aを中核として、次第にb c dが附加され」た前半に、何人かが「eと付録26を取り合わせて」成立した篇だと結論づけている。後半の十一章（15～25）については、孝に關係した四章（18～21）が連続して並べられている以外は、配列方針はなく「雜纂」であると言う。

また編集について、木村氏はこの篇に見られるいくつかの對應を指摘している。たとえば、

8 子曰、朝聞道、夕死可矣。

9 子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。

と

15 子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出、門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。

は「道」を言う」点で「相應じ」ている。また、

16 子曰、君子喩於義、小人喩於利。

と

10 子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比。

11 子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。

について、16は「君子」を「小人」に對して述べているから、「10・11が『君子』を言う（殊に11では「君子」を「小人」と對比して述べている）のと相應じる」と言う。

さらに、1と25は「里仁篇の首尾を占めて相對應し、いずれも、君子の内に藏すべき仁の徳と外的な社會環境との關係をのべている。『里仁』、『處仁』と言ひ、『有鄰』というのがそれである」と言う。また、「1と7との二つは、いずれも、人間が社會環境から大きな影響を受けるものであることを前提にして、その角度から仁について説いている。『里仁』とか『處仁』とか『於其黨』とかがそれである。その意味で、ほのかに相對應していると言つてよい。」と言う。

最後の26章については、18章と「相對應してその缺を補っている」とし、「編輯者がe 18の孔子の言葉が、父母を諫める場合だけを言つて君主や友人を諫めることに言及していない缺を補う意味で、eの後に附記した一章なのである」と言う。

1〜25全體については、後半の17〜25も「いずれも例外なく君子のことを述べたもの」で、「その意味では前半のcの10・11、およびdの12〜14等と相補う關係にある。かくて前半a十一章と後半e十四章とは、いずれも『道』『君子』等に關する格言集で、この二つの格言集を取り集めて里仁篇ができて」とまとめている。編集の

目的については、「仁を志す同志を集めて、よい郷里郷黨を作りたい、という希望を掲げ、それを築くために参考すべき孔子の名言を集めて、一種の格言集を作ることにあつた。」と言う。

二 木村氏の構造分析の問題點

木村説は、篇の構成單位として章群や章群聯關の存在を視點の中心にすえたもので、各章の重要語や語の對應に注目しただけの考察が多く、表面的な分析に止まっている。以下、具體的に問題點を考えてみよう。

① 構造分析の内容について

木村氏は、篇の全體について「『道』『君子』等に關する格言集」と言うが、「道」と「君子」に關する章が一緒にまとめられているのには理由があるのではないだろうか。また、17〜25も「いずれも例外なく君子のことを述べたもの」であるなら、里仁篇は「順次に後者が前者を補足する形に編集した」ものではなく、前半、後半の全體がまとめて一時に編集されたと考えることはできないのだろうか。

「雜纂」という判斷にも疑問がある。後半の「十一章は孝に關係した四章が連續して並べられている以外は、配列方針はなく雜纂である」と言うが、連續はしていないが「言」に關係した章が二章ある。里仁篇が「子曰」で始まる章を集めた整然とした形態を持ち、「仁」「道」「君子」、さらに「孝」や「言」に關係した章が集められていることこの背景をさらに考察する必要があるのではないだろうか。

② 構造分析の方法について

木村氏は章群や章群聯關の存在に注目し、この篇では特に「仁」「道」「君子」などの章群やその他重要語の對應を中心に篇の構造を考えている。しかし、篇の構造を見極めるためには、まず一章ごとにその配列順序について編者の意圖を考察することが必要である。そして、それと同時にあるまとまりについて編者の意圖を検討することになる。

以上であるが、ただ「はじめに」で述べたように、里仁篇の全體は統一的に編集されたものではないという見方は木村氏に限られることではなく、今日の一般的な理解である。木村氏と前半後半の分け方は異なるものの、胡志奎氏も次のように述べている。⁽¹⁾

「里仁」前七章、均しく反覆して「仁」を言ひ、篇名と正に相應す。然れども第八章「朝聞道、夕死可矣。」より末に至るまで、其の内容の記す所を細察するに、大抵「道」「徳」「禮」「義」の事を言ひ、未だ特に「仁」を言はず。本別に篇を爲し今則ち已に合して一を爲すに似たり。

里仁篇の構造や編集について、このような木村氏や胡志奎氏の見解は妥當なものであろうか。以下では改めて里仁篇の構造分析を行つてみたい。

三 里仁篇の構造分析

里仁篇全體を見た時、1から7までに「仁」の章が連続しているが、8以降においても、①共通の重要語を持つ章や、②同類の章のまとまりがある。具體的には、①は「道」(8 9 15)、「君子」(10 11 16)の章、②は「孝」

(18～21)の章である。

さらに22 23 24も「言」の章としてまとめられる。なぜなら、22「子曰く、古者言を之れ出ださざるは、躬の速ばざるを恥づればなり」と24「子曰く、君子は言に訥にして行ひに敏ならんと欲す。」の二章に挟まれた23「子曰く、約を以て之を失ふ者は鮮し」とは、謙虚さを尊重するところに分かりにくいので、編者はこのような配列を考えたのであろう。三章全體として見れば、その内容は態度は控えめにしつつも實行を重んじる主張としてまとめられる。

さて、里仁篇全體に共通するものは何であろうか。特に8以降、雑多な要素が入り混じっているように思われる配列に何か共通する方針はないのであろうか。なお、以下の考察では25 26の最後の二章は除外し、1から24までの章について考えたい。25は木村氏の言うように1と首尾對應の章であらうし、26もこの章だけが「子遊曰」で始まって異質であり、これも木村氏の言うように「附記した一章」として考えられるからである。

「仁」「道」「君子」「孝」「言」の各章はそれぞれが別々の事柄のようでもあるが、これらの章で篇の大部分は占められており、篇の中で強い結びつきを持って配列されているようでもある。その場合、中心となるものは「仁」であろう。

「仁」「道」「君子」「孝」「言」以外の残りの章は、12「子曰、放於利而行、多怨。」13「子曰、能以禮讓爲國乎。何有。不能以禮讓爲國、如禮何。」14「子曰、不患無位、患所以立。不患莫己知、求爲可知也。」17「子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也。」の四章である。これらの章は内容が全くばらばらで、一見したところ「仁」とも關連を持たないようである。以下検討を加えてゆきたい。

それではまず、9～14と15～24では違いが見られることについて述べよう。

9～14を見てみよう。9「士は道に志し」、10「君子の天下に於けるや」、13「禮讓を以て國を爲」む、14「位無

きを患へず」は、「天下」や「國」を視野に置いた内容であり、抽象的概括的に教訓を述べているようである。また、11「君子は徳を懐ひ、小人は土を懐ふ」と12「利に放りて行へば怨み多し」は、13「禮讓を以て國を爲めんか」の前に置かれ、この三章は、「君子は徳を懐」うので「利に放りて行」つてはならず、そのように「國を爲」めなくてはならないという關連を持つて配置されていると思われる。つまり、この9〜14は「公」のレベルでの一般論を述べている。

それに對して、15「子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。」は、武内義雄が「(仁の) 實行方法を示している」と言うとおりであるが、「吾が道は」という個人に屬する事柄、18〜21は、やはり武内が「仁道の具體的行爲は孝に始まることを示したもの」と言うように、孝の實踐という具體論を述べている。22 23 24三章も「言」に關連を持ち具體的な内容である。

ただ、16「子曰、君子喻於義、小人喻於利。」は、一般論を述べており、むしろ9〜14の「公」に屬するものようである。そこで、この章の「君子は義に喻る」という内容を前後の章とのつながりの中で考えると、この章がここに位置している理由が納得される。前15章で、「一以て貫く」を曾子が「夫子の道は、忠恕のみ」と述べたこととは、16「君子は義に喻る」ことである。同時に16「君子は義に喻る」は、後17章の「賢を見ては齊しからんことを思」うことを結びつき、15における、曾子や「門人」が孔子の言動を見て學ぶ様子を連想させる。従つて16章も個人の心構えを説明していると考えられる。

そうすると15〜24のすべての章は個別の、より具體的で身近な實踐や心構えについて述べていることになり、9〜14の「公」のレベルに對して「私」のまとまりが考えられる。

以上のことから、9〜24を整理してみると次のような對比的な構成が考えられる。

A 9「道」10「君子」11～14（實踐）〈公的レベル〉

B 15「道」16「君子」17～24（實踐）〈私的レベル〉

次に、9～24全體について共通する内容を考えてみると、これらの章はすべて「仁」と関連を持っているようである。編者は「君子」を「仁」を體得した理想的人物だと考えているようであり、9～24の章は、公と私両面における「君子」のあり方、心構え、行いなど述べているが、それはすべて「仁」に結びつくものである。章單獨では、「仁」との関連がないように見えた12 13 14 17の四章も、前後の章のつながりの中で、やはり「君子」との関連が考えられたのである。

ただ、「道」とは何であろう。また、章の配列の上で1～7「仁」の章と9～24との間に位置する8「朝聞道」章の役割が、まだ不明である。8は〈公的レベル〉のまとまりに入れることができない。この章の解釋は古注新注で異なるが、孔子自身の心境が吐露されたものと見る點では共通している。それならば〈私的レベル〉ということになるが、それでは8は以下に續く〈公的レベル〉に連續しない。それだけではなく、この「朝聞道」章は公私の分類に當てはまらない、異質な内容を語っているようである。

なぜこの章は8に配置されているのだろうか。この疑問を、さらに篇全體の構造を分析することで解き明かしてゆきたい。

そこで、まず1～7の配列について検討したい。單に「仁」の章が連續しているだけのまとまりと見える1～7においても、配列の中に編者の意圖があるかもしれないからである。1と7には、確かに木村氏の言うように、「里」と「黨」という共に集團を意味する語の對應が見られ、編者の意圖が働いた配列になっているようである。

さらに、考察を加えると、5に「道」と「君子」の語が含まれていることが注目される。これを、先の15～24で見

た「道↓君子↓實踐」の配列と考え合わせると、6以下に「實踐」の内容が續く配列になっていることが推測される。

そこで、2 3 4の章と6 7の章との違いを検討してみよう。2「仁者は仁に安んじ」、3「唯だ仁者のみ能く人を好み」、4「苟も仁に志せば、悪まるる無し」などの内容は、仁の價値や意義を説明している。それに對して、6は「能く一日其の力を仁に用ふること」7は「人の過つや」などと述べられており、確かに實踐的な趣を持つ内容になっている。そうしてみると、この1〜7でも「道↓君子↓實踐」という配列が確認できる。

さらに細かく、1〜4の部分についても考察してみよう。1〜4は全體に「仁」の價値や意義を述べ、「仁」を稱揚する趣があるが、その中でも冒頭に位置する1「里は仁を美と爲す。擇びて仁に處らずんば、焉んぞ知たるを得ん。」（「仁に里るを美と爲す。」という讀み方もある。）は、特に「仁」を稱揚しているようである。

以上のように考察を進めると、8 9について、なぜ「道」の章が二つ續いていたのか、そして同時に8に「朝聞道」章が配置されていた理由が明らかになる。9は〈私的レベル〉の「道↓君子↓實踐」の流れの最初に位置する役割を果たしているのに對して、8は以下の9〜24の章を配列するに當たって、「道」そのものを大きく稱揚する役割を果たしているのである。

同様の考えに基づくくと、10と11に「君子」の章が連續していることについても配列の意圖が讀み取れる。10「子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比。」は天下における「君子」のあり方を述べて「君子」を稱揚する意味があるのに對して、11「子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。」は單に「道↓君子↓實踐」の配列における「君子」の章である。

ところで、1が7と對應していることは既に述べた。そうすると、8も9〜24の末尾に位置する24との對應が推

測される。24「子曰、君子欲訥於言而敏於行。」は、「君子」は行いに「敏」であらねばならないとする内容である。そうすると、8も「道」を聞いてすぐに實行するという内容と関連があるのではなからうか。ただ、この8章は解釋が古注新注で大きく説が異なっている。章の理解がある程度定まらなくては章と章とのつながりや篇の構造も見極めにくい。その意味においては5「富與貴」章も古來議論の多い章である。そこで、以下にはこの二つの章の解釋を検討する。

四 「富與貴」章の解釋

(一) 問題の所在

子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。

この「富與貴」章は非常に問題の多い章である。特に二カ所ある「不以其道得之」の解釋について甚だ問題がある。まず朱注をみると、

其の道を以てせずして之を得とは、當に得べからずして之を得るを謂ふ。然して富貴に於ては則ち處らず、貧賤に於ては則ち去らず。君子の富貴に審かにして貧賤に安んずるや、此のごとし。^{十一}

とし、二つの「之」の字を直接上の「富貴」「貧賤」を受けると考えている。この場合「貧賤」に對して「得」という表現になってしまう點が非常に奇異である。この問題は朱子のはるか以前、後漢の王充がすでに指摘していたことである。王充は言つ、

貧賤何が故に、當に之を得と言ふべき。顧ふに當に貧と賤とは、是れ人の惡む所なり、其の道を以て之を去らずんば、則ち去らざるなり、と言ふべし。當に去と言ふべく、當に得と言ふべからず。^(十一)

「貧賤」については、「得」ではなく「去」と書かれるはずだと王充は考えている。

もう一つの問題點は、朱注によれば、「不以其道得之」の句讀は「其の道を以てせずして之を得れば」となることである。

何晏の「論語集解」(以下「集解」と略す)には

孔曰く、其の道を以て富貴を得ざれば則ち仁者は處らざるなり。時に否泰有り。故に君子は道を履みて反つて貧賤なり。此れ則ち其の道を以て之を得ず、是れ人の惡む所と雖も、違ひて之を去るべからずと。^(十二)

とあり、何晏は「不以其道得之」の句讀を「其の道を以て之を得ざれば」と考えているようである。

出土資料の卜天壽本でも、鄭注が「富貴を得る者は當に仁を以てすべし。仁を以て之を得ざれば、仁者は居らず。」^(十三)「貧賤を得る者は當に仁を以てすべし。仁を以て之を得ざれば、仁者は去らざるなり。」^(十四)となつており、これも句讀は「其の道を以て之を得ざれば」となる。

朱注のように讀めば、「以其道」と「得之」が切り離されてしまう。それに對して、『集解』や鄭注のような讀み方は、上の句である「不以其道得之」が、下の句である「不處也」や「不去也」の條件を示す形で自然な讀み方であり、これは「以其道得之」が實現できるかどうかを問題にしている理解の仕方になる。思うに、「以其道得之」には書き手(語り手)の胸の内に抱く、當然そうであるべき状態が表現されているようであり、「以其道」と「得之」は切り離すことはできないものである。

次に、「其道」の内容についていくつかの注釋を見ておきたい。古注、新注はともに明確な解説が見られないが、

伊藤仁齋は「所謂道とは即ち仁なり」とし、二つの「其道」を同じものとして捉えている。しかし、「道」がただちに仁を意味するならば、道とだけいえばよく、「其道」ということは無用である。

これに對して、荻生徂徠は「其」はそれぞれ「富貴」「貧賤」を受けると説明しつつ、「蓋し其の道を以て之を得ざれば處らずとは、此れ富貴を得るの道は、即ち仁なるを言ふ。其の道を以て之を得ざれば去らずとは、此れ貧賤を得るの道は、即ち不仁なるを言ふ。」と述べる。だが、「貧賤を得るの道」という述べ方に對する問題は王充の疑問として既に示したとおりである。また、徂徠の説では二つの「道」をそれぞれ相反する二つのこととして解しているが、この點にも問題が生じよう。

以上のように、この章の、特に「不以其道得之」の解釋については諸説があり、かつどの説を採っても難點がある。近現代の譯注書を見ても、特に新しい解釋は見られず、問題は依然として残っている。

(二) 「其道」の検討

さて、改めてこの章を眺めて見ると、實に整った表現形式を持った章である。思うに、ここで述べられている内容は諸説紛々のどの説とも異なり、その引き締まった結構に見合うような簡潔明快なものではないだろうか。

以下に検討を加えてゆきたい。まず、「不以其道得之、不處也。」「不以其道得之、不去也。」の主語は、以下に續く文に「君子去仁、惡乎成名。」とあるように「君子」であろう。そこで、「處」「去」についても語を補ってみると、

1 富與貴、是人之所欲也。(君子) 不以其道得之、不處(於富與貴)也。

2 貧與賤、是人之所惡也。(君子) 不以其道得之、不去(於貧與賤)也。

という文が考えられるが、この時「其」は「君子」を指していると考えられる。そうすると「其道」とは「君子の道」と考えられる。「君子之道」という表現はあとで示すように他篇でも散見される。

次に、「君子の道」という場合の「道」とは何かを考えたい。前章では「道↓君子↓實踐」という配列の繰り返しを考察した。この配列は「道」のあとに「仁」の體得者たる「君子」が述べられ、具體的な實踐の章が續くという配列である。特に8「朝聞道」章は以下に續く章群をまとめて「道」を稱揚していた。9章以下には孔子が推奨する「君子」のあり方や望ましい實踐が述べられていたことを考え合わせると、「道」とは實踐、つまり「仁」につながる「君子」の實踐を意味していると推察される。

それでは、この推測を『論語』の他篇の章によつて檢證してみたい。「道」と「仁」とが一緒に述べられた章の一つに、學而篇の「有子曰、其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作亂者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。」がある。劉寶楠の『論語正義』には、

本立ちて道生ずとは、李賢の後漢郎顛傳注に、立とは猶ほ定のごときなりと。道とは、人の由つて行く所の路なり。事物の理は、皆人由つて行ふ所なり、故に亦道と曰ふ。漢書董仲舒傳に、道とは、繇よつて治に通ずる所の路なりと。是れなり。(一七)

とある。「道」とは、語の基本義からしてある目的地に到達するための手段であり、一步一步土を踏みしめつつ歩んでゆくものであるから當然實踐の意味を伴う。この注で言う「皆人由つて行ふ所」も、あることに向かつての絶對的な道筋、または必ずこれに據らなければ目標に到達できないものである。

胡志奎著『論語辨證』では、『論語』の「道」の用例を檢證して、その多くは「德行」に係わるものと結論づけている。(一七)

そこで、ここで改めて『論語』の中で、「道」が「君子」の實踐、ないしは単に行い、實踐の意味に用いられていると思われる具體例を示すと、

① 子謂子産、有君子之道四焉。其行己也恭、其事上也敬、其養民也惠、其使民也義。(公冶長)

② 不伎不求、何用不臧。子路終身誦之。子曰、是道也、何足以臧。(子罕)

③ 子夏曰、百工居肆以成其事、君子學以致其道。(子張)

④ 子游曰、子夏之門人小子、當洒掃應對進退則可矣。抑末也。本之則無。如之何。子夏聞之曰、噫、言游過矣。君子之道、孰先傳焉、孰後倦焉。譬諸草木區以別矣。君子之道、焉可誣也。有始有卒者、其唯聖人乎。

(子張)

などがこれに該当するであろう。①では子産が行った四つの實踐が「君子之道」としてまとめられている。②は「君子」の語はないが、子路が詩經の「伎はす求めず」の句を自らの人生訓としていることに對して、孔子は、「是道」すなわち「伎はす求めず」の實踐だけでは不十分だと述べているようである。③では主語が「君子」で以下に「其道」とあり、「富與貴」章とよく似た表現がなされている。その内容も「其の道を致す」は、前半の、職人が仕事場において仕事を行う内容と對比されて述べられており、「君子」の實踐を意味していると考えられる。④では子夏の門人の日常的な實踐を、子游が「末」と述べたことに對して、子夏が「君子之道」を説明している。従って、「君子之道」とは「君子」の行いのことである。

以上のことから、やはり「富與貴」章における「道」とは「君子」の實踐、つまり「仁につながる實踐」を意味していると考えられる。

(三) 「之」「名」の検討

次に、「之」は何を指しているかという問題を考えたい。筆者は「名」ではないかと考える。その場合、「名」が指示語である「之」の後にきていることが問題となろう。先の(二)でも、「其」の指す言葉（君子）は省略されて「其」の前にないと筆者は考えた。「其」が書かれていない語を指し、「之」が「之」の後に来る語を指すことはいないのであろうか。論語の他篇の章によって検証してみたい。次のような例がある。

⑤ 子曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不從。（子路）

この「其」は、「令す」の主體となる人物である。そして、その主體は語り手の念頭にあり、省略されているという点から言えば、「富與貴」章における「其」と「君子」の関係と同じである。

⑥ 子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。（爲政）

この「其」は以下にある「人」を指している。だから、この場合は「富與貴」章における「之」と「名」の関係と同じである。

なぜこのような例が『論語』に散見されるのかと言うと、それは『論語』の成立事情に關係があろう。言うまでもないことだが、『論語』の言葉は孔子が自分自身で書き記したのではなく、もともと會話として話された言葉が、弟子によって傳承され記録されたものである。そして、その言葉は暗唱されて傳承されることが多く、その長い傳承の過程の中で、『論語』の言葉は枝葉を切り取った、簡潔で洗練された表現になってきたと考えられる。

さて、「名」については、古注、新注とも「君子としての名」と説明している。^(三十一)しかし、卜天壽本鄭注では「言唯仁可以立身有名譽之（也）」（唯だ仁以て身を立つべく之を名譽とすること有るを言ふ（なり））として、「名譽」と説明している。

それでは、『論語』における「名」の用法を見てみてみよう。

⑦ 達巷黨人曰、大哉孔子。博學而無成名。子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御乎。(子罕)

⑧ 子曰、君子疾没世而名不稱焉。(衛靈公)

⑦では「成名」とあり、里仁篇と同じ表現がなされている。そして、孔子はあまりに偉大であり、世俗においては孔子の価値が名聲としてむしろ認められていないことが述べられている。つまりここでの「名」は、名聲の意であろう。⑧も「世」において譽めたえられる名聲の意である。この章でも「其道得之」を「君子」の實踐によって名聲を得ると解すれば、文意はよく通る。

(四) まとめ

では、以上の考察に基づいてこの章の文意をまとめると次のようになる。

I 富貴は人がほしがらるものである。しかし、君子は、君子としての實踐によって名聲を得るのではなく、富貴に身を置くことはしない。

II 貧賤は人がいやがるものである。しかし、君子は、君子としての實踐によって名聲を得るのでなければ、貧賤から去ろうとはしない。

III 君子は仁から離れて名聲を成すことはない。君子は食事をするような少しの時間でも仁に背くことはない。せつばつまつた時でも、つまずき倒れてしまう時でも仁を行う。

この解釋は、その整然とした章の表現構造と簡潔明快であることに於いて一致する。

『論語』の言葉は、大半が語録でありながら、その言葉が發せられた背景がほとんど記されていないという特殊性がある。この「富與貴」章も言葉の背景となる場面が記されていない。ただ、章の内容からその場面は想像される。それは、弟子たちの間で、「仁」であることと「富貴」や「貧賤」、また名聲を得ることなどの關連が話題となつてゐる場面である。そのような時、孔子が「君子」の態度とはどのようなものかを教え諭した言葉がこのように記録されたのではないだろうか。「君子は世を没するまで、名の稱せられざるを疾む。」（衛靈公）とあるように、孔子は「名」を得ることも重要だと考えている。だが、それは仁を離れては成り立たないということをこの章は述べていると考えられる。

五 「朝聞道」章の解釋

子曰、朝聞道、夕死可矣。

この章についての『集解』の注は

將に死に至らんとして世に道有るを聞かざるを言ふ。(二十七)

であり、朱注は

道とは事物當然の理なり。苟も之を聞くことを得ば、則ち生きては順ひ死しては安んじ、復た遺恨無し。朝夕は甚だ其の時の近きを言ふ所以なり。(二十四)

である。

古注と新注では全く異なる解釋をしているわけであるが、ただこの二者は、この章を孔子が自身の切迫した心

境を述べたものと見る點では共通している。それに對して、次に示す日本の三人の儒者は、そうは考えていない。伊藤仁齋は「此れ老衰に託し或ひは微恙に罹りて肯て學を爲さざる者の爲に發す」と述べ、孔子が人に教えた言葉だと考えている。

皆川淇園は、

此の章其の力を仁に用ふる者を言ふなり。朝夕の二字は、又前章の用力と其の義相符す。故に編して此に在るなり。言ふところは人或ひは道に於いて必ず行ふの念を起こして、如し朝に之を聞かば、則ち即日必ず之を行はん、或ひは因つて其の勞疲を以て夕べに死するに至ると雖も、吾亦顧みず、以て之を進取せんと冀ふと曰ふ者有り。如し此のごとくなれば則ち始めて仁に志すと謂ふべきなり。

と言ひ、「力を仁に用ふる者」の様子を述べた言葉だと解している。

藍澤南城は、

文意を詳するに、晩學の人來たりて入門する者有り、日暮れて途遠し、猶ほ到るべきかと問ふ、而して夫子之に答へて爾云ふ者に似たり。晉の周處晩に節を折り、陸機の門に詣るに、機此の言を引ききてを誘ふ、善諭と謂ふべし。

と言ひ、孔子が年老いて入門した人を勵ました言葉だと考えている。

「道」について、仁齋は「夫れ道とは人の人たる所以の道なり。」と言ふ。淇園や南城は「道」についての定義づけはしていないが、淇園の「道に於いて必ず行ふ」、南城の「日暮れて途遠し、猶ほ到るべきかと問ふ」との説明を考えると、ある目標に向かつて學び努力することとの關連で「道」を考えているようである。

ところで、卜天壽本の鄭注では「言君子渴道、无有醉飽之心、死而後已也。」(言ふところは君子道に渴き、醉飽

の心有る無し、死して後已む。」とある。これによれば鄭玄も、この章を「君子」のあり方を説明したものと捉えている。^{二十五}

少し観点を變えて、文の表現構造について検討をしてみたい。この8章は「朝聞道」と「夕死可」とが對置されている。この表現は、「朝」、「道」を聞いたなら「スグ死んでもいい」ということとは違う。「スグ死んでもいい」という場合は「朝聞道」がより重要なことであるから「朝」と「夕」とを對置する必要はなく、「スグ」の意が傳わりやすい表現になるはずである。「朝夕は甚だ其の時の近きを言ふ」（朱注）という主張も「スグ死んでもいい」という理解の仕方と基本的に同じである。

「朝聞道」と「夕死可」とを對置する表現をとる背景には、①「聞道」と「死可」を同等に見る意識、②「朝聞道」と「夕死可」の間に、時間の経過を考える意識、③「朝」と「夕」というような對應關係にある語を用いようという意識がある。

①の意識は、「聞道」と「死可」がともに日常生活における重大事だという意識である。「死」は當然のこととして「死可」と言えるかどうかは重大な問題を含んでいる。また「聞道」についても、南城は晩學の人が入門する場面を考えているが、晩學の人かどうかは別にしても、この時代に孔子に會つて話を聞くことは簡単なことではなかつたはずであるし、それ以上に孔子から「道を聞く」ことは、今日では想像しにくくなつた大きな意味を持つものだつたと思われる。②の意識は、「道を聞」いたあとに「道を聞」いた者が何らかの行爲を爲すことを必然のこととして想定している意識である。そして③の意識は、書き手（語り手）が、A「朝」とB「夕」の間において重要な行爲がなされるはずだという認識を持つているが故に、読み手がAとBのいずれか一方に重點を置いて讀まないように配慮し、AとBに單純な對應關係を持つ語を用いようとする意識である。

このように考えた時、「道」とは「富與貴」章と同様、「仁につながる実践」と考えられる。

最後に本章のまとめとして、ここでは南城の注釋を取り入れて背景となる場面を補足しつつ、この章を現代語譯しておきたい。

(年をとってから入門した人が、「私のように遅くなつて學問を始めた者にとっては、あまり多くの時間がありません。先生のおっしゃる仁にまで到達することができるでしょうか。」と尋ねた。) 先生が(答えて)言うことには、「(もしも)朝に、仁であるための実践について聞(いて、その実践を始め)たならば、(假に)その日の夜に死を迎えることになつたとしても、(それだけでも)仁を實踐した(價值のあることだ)と言えます。」と。

六 結論

(一) 里仁篇の構造と編者の人物像

まず、これまでの考察によつて得られた里仁篇の構造を表にまとめてみよう。

表のように、里仁篇は非常に整つた構造を持つた篇である。これは、編者が構成をよく練つたことの結果である。各章は枝葉を切り取つて整理することはあつたかもしれないが、意圖的に言葉を足すことはなかつたと思われる簡潔な文である。そして編集においては、抽象と具體の組み合わせ、總論(公)と各論(私)の位置、そして對比と繰り返しなどの技法を用いてはいるが、それは表面的に目立つようなものにはなつていない。

一つの主題のもとに、孔子の言葉を簡素な文として集合させ、仁の徳や仁に關する孔子の思想を緊密なまとまりを成す篇として編集し、傳承する。里仁篇の編者はこのようなことができる優れた力量の持ち主である。

里仁篇の構造表

	主要な構成要素	構造
1	仁	仁 (稱揚)
2	仁者	
3	仁者	仁
4	仁	
5	道・君子・仁	道・君子
6	仁	実践
7	仁	
8	道	1と對應
9	道	道 (稱揚)
10	道	
11	君子	君子 (稱揚)
12	君子	
13	利	公的レベル
14	禮讓	
15	位	実践
16	道	
17	君子	道
18	賢・不賢	
19	父母	私的レベル
20	父母	
21	父之道	実践
22	父母之年	
23	言	君子 (稱揚)
24	約	
25	君子・言	8と對應
26	徳	1と對応

『論語』の他篇においては、このように緊密な構成を持つ篇はないようである。このことは里仁篇だけが他篇と異なり、最後の一章を除いてすべての章が「子曰」で始まる章で統一されていることと符合しているように思われる。ただ、今後他篇についても編集のあり方については十分な検討が必要であろう。

(二) 里仁篇の編集

以下には、これまでの考察の上に立って、里仁篇の編集を追体験する形で私見をまとめてみたい。

編者は、篇全體として実践まで含めた「仁」の徳を表す、統一された體裁を構想し、すべて「子曰」で始まる章で篇を構成しようと考えた。ただ、「吾道一以貫之。」の章は問答體で、他とやや異なる形態であるが、「夫子之道、忠恕而已矣」が「仁」に關して孔子個人の實踐を示すものとして重要であること、曾子が門人に孔子の「道」を説明している内容は次章に「君子は義に喩る」ことにつながる内容の章を配置できること、などの點からそのまま採用した。

編者は「仁」が實踐道徳であることを考慮し、その實踐ができる「君子」の存在を掲げ、「君子の道」とは具體的にどのような實踐をすることなのかを篇全體として知らしめるようにしたいと考えた。このような構想の背景として考えられることは、もともと弟子によって記録された多くの孔子の言葉は、連續性を持たないバラバラのものであったことがあげられる。従って、編集の段階では、集められた孔子の言葉を、配列の工夫により分かりやすく傳承しようと考えたのであろう。或いは逆に、孔子の時代から既にかんりの年月を経ている編者の時代においては、この言葉が述べられた場面や背景が忘れられつつあったので、孔子の思想を伝えるために、そのような構成をとることが必要であったのかもしれない。

さて、集められた孔子の言葉を編者は分類しつつ篇の構成を練ったと思われる。①「仁」そのものについて述べているもの、②「道」の重要性を述べているもの、③「君子」のあり方を述べたもの、④「道」の具体的な内容にあらるものの四つに分類した。

このように分類された材料をどのように配列するか。まずはテーマとなるべきものを示し、以下にはそのことを具体的に述べていくというのは自然な発想であった。つまり編者は「仁」→「道」→「君子」→「実践」という配列を考えた。その中で、実践の章に關しては總括的、公的な内容に關わるものと私的な、個人のレベルに屬するものとに分類し、同時に「道」→「君子」→「実践」という繰り返しがなされる工夫も考えた。

編者は「仁」の意義が述べられる四つの章を最初に配列したが、その中で「子曰、里仁爲美。擇不處仁、焉得知。」を「仁」の徳を稱揚する意味から篇の冒頭に置き、「里」との對應を考えて、「黨」の語を含む「子曰、人之過也、各於其黨。觀過斯知仁矣。」を7に配置した。5には、同じ「仁」の章ではあつても「道」「君子」の語を含む「富與貴」章を置いた。「道」→「君子」→「実践」という配列を意識したためである。次に「仁」の語を含みつつ、より具体的な内容を持つ「子曰、我未見好仁者、惡不仁者。好仁者、無以尚之。惡不仁者、其爲仁矣、不使不仁者加乎其身。有能一日用其力於仁矣乎。我未見力不足者。蓋有之矣、我未之見也。」を6に置いた。

後半の「仁」につながる実践の章を載せるにあたり、「道」の意義を大きく稱揚する意味で「朝聞道」章をまず8に配置した。「道を聞き、その後じきに「死」に至るとしても、「仁」の実践を行うことは尊いことだというのがこの章の内容である。

以下、「道」→「君子」→「実践」という配列の第一としては公的レベルでの実践に關わる章を配置したのであるが、その最初は9「子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也。」である。これは公的な地位についている人物が、

「仁」に基づいた行動をとるときに悪衣悪食を恥じるようではいけないと鼓舞する内容である。

次に10「子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比。」と「君子」の「天下」におけるあり方を示して「君子」を稱揚し、以下に11「子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。」を續けた。この章は抽象的である。そのため、次にはこれを分かりやすく12「利に放りて行ふ」とは「小人」の行いであると戒め、13「禮讓を以て國を爲」めること、14「位無きを患へず」と公的なレベルでの具體論を連續させた。

「道↓君子↓實踐」という配列の第二は私的な個人のレベルである。15に掲げた「子曰、參乎、吾道一以貫之哉。曾子曰、唯。子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。」は孔子個人の實踐の中心が「忠恕」であることを述べており、曾子の言葉として述べられているので、16「君子は義に喩る」ことにつながる。それはさらに、17「賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省みる」と、「君子は義に喩る」ことを具體的に示していることに連續しており、さらに「賢を見て」は、曾子や「門人」が孔子の言動を見て學ぶことと關連している。

なお、11「子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。」と、16「子曰、君子喩於義、小人喩於利。」とは二章とも「君子」と「小人」の語が使われており、公的レベル私的レベルの對應に着目して編集した。

その次に「孝」に關する四章を配置したのは、「仁」の徳において「孝」の實踐は缺すことのできない重要な孔子の思想だからである。

質朴を好ましいと考え多言を戒めることもまた孔子の重要な思想である。當然それは、「仁」であるための實踐でもある。「子曰、巧言令色、鮮矣仁。」（學而・陽貨）、「子曰、剛毅木訥近仁。」（子路）などの章からそれは知られる。ただ編者は、里仁篇では「道↓君子↓實踐」という配列からして、「仁」の語を含まず、實踐面だけを述べ

ている章を採用した。すなわち、22に「子曰、古者、言之不出、恥躬之不逮也。」を、24に「子曰、君子欲訥於言、而敏於行。」を置き、23「子曰、以約失之者、鮮矣。」はこの章單獨では章の意味するところが分かりにくい章であるので、22と24の間に置くことで三章の精神が共通していることを暗に示した。第24章は同時に、實行することが尊いという精神が、8「子曰、朝聞道、夕死可矣。」と共通しており、8との對應を考えたのである。また、24章は「言」「君子」「行」の語を含んで重みがあり、實踐を説くまとまりの末尾に置くのにふさわしい章でもある。

25「子曰、徳不孤、必有隣。」が、「仁」と「徳」との首尾對應として最後に配置されたのは、章の對應が他にも多く見られることからやはり最初の編者によるものなのであろう。そして、26「子遊曰、事君數斯辱矣。朋友數斯疏矣。」はなんらかの事情によってその後付加された章だと考えられる。(三十一)

おわりに

『論語』の編集に關しては、從來から章の重出の問題が多く議論されている。里仁篇においては、三つの章が字句の異同があるものの、他の篇でも見られ重出となつてゐる。この點について、編者の意圖を認めるか否か、さらには同じ重出であっても章の字句に違いがあれば、その違いに編者の意圖が働いているか否かの検討が必要である。筆者はこのような検討によつても、里仁篇が一時の編集であり、篇として統一されているという本稿の結論の證左が得られると考えている。ただ、『論語』における章の重出の問題は古くから現代まで論じられていて、相應の紙數を要する大きなテーマである。従つて、これについては稿を改めて論じることにはしたい。

(一) 『論語』二十篇全體の編集や編集者についての議論は數多く、部分的に章と章との關連に言及したのも多くなるが、章と章との關連に着目して各篇の編集を扱った專著ないし論考ということになると、中國・臺灣においては、なかなかこれを見つけることは難しい。古く郝敬の『論語詳解』では、各篇において部分的ではあるが努めて章と章の關連を考えて説明しようとしている。だが、古來からの多くの説を集めた程樹德撰『論語集釋』では、「考異」「考證」などのほか「餘論」や「發明」など十の項目を設けて諸説を紹介しているが、その中で章次に關する説を述べたものは非常に少ない。日本でも状況は似てはいるが、皆川淇園の『論語釋解』は章の關連を述べたものとして知られているし、葛葵岡の『論語一貫』もしばしば章次について言及がある。最近では、『論語』各篇の構造と編集を詳論している木村英一著『論語と孔子』がある。ただ、現代においても篇の編集に關する論考はほとんど見られない。

(二) 岩波文庫『論語』(金谷治譯注) 四頁。そもそも、邢昺は『論語注疏』の「學而第一」で「學而以下爲當篇之小目。其篇中所載、各記舊聞、意及則言、不爲義例。或亦以類相從。」と述べている。

(三) 『論語私説』は自筆稿本で新潟縣立圖書館藏。詳しくは拙稿「藍澤南城の『論語私説』について」(『中國古典研究』第三十八號)を参照。藍澤南城は越後の國刈羽郡北條村南條、現柏崎市南條の人。一七九二—一八六〇。詳しくは『新潟縣史』、『柏崎市史』、内山知也著『藍澤南城 詩と人生』(東洋書院)など参照。

(四) 例えは爲政篇「子曰、詩三百一言以蔽之。曰思無邪。」章の注では「編者引之以明脩德之在誠意正心也。下章有恥且格、乃人君思無邪之所效。」などと述べている。詳しくは拙稿「藍澤南城の『論語私説』について」(注3)参照。

(五) 『論語の研究』(武内義雄全集第一卷百一頁)

(六) 創文社、東洋學叢書。以下の木村氏の見解は、『孔子と論語』二一八三頁「里仁篇の性格と構造」による。

(七) 本稿における論語本文は十三經注疏本を底本とした。朱熹の集注本(吳志忠本)は、この十三經注疏本と里仁篇の本文について文字の異同はなく、章の分け方も同じである。また近年の出土資料においては、(一)敦煌本(下天壽抄寫鄭注殘本)、(二)定州漢墓竹簡『論語』を参照した。これらと十三經注疏本とを比較してみると、里仁篇の章の分け方に違いは見られない。文字の異同は多いが誤字や脱字を含んでおり、多くは章の解釋にはほとんど影響を與えないものであるが、中には注意を要すると思われるものもある。ただ、本稿の考察においては特に取り上げる必要はないと判断し、論を進めた。なお、最も新しい平壤簡『論語』には里仁篇は含まれていない。

(八) 『論語辨證』(聯經出版事業公司 中華民國六十九年)四九頁。原文は次の通り。

『里仁』前七章、均反覆言『仁』、與篇名正相應。然自第八章『朝聞道、夕死可矣。』至末、細察其內容所記、大抵言『道』『德』『禮』『義』之事、未特言『仁』。似本別爲篇、今則已合而爲一。」

(九) 武内義雄前掲書百四頁。

(十) 武内義雄前掲書百四頁。

(十一) 原文は次の通り。「不以其道得之、謂不當得而得之。然於富貴則不處、於貧賤則不去。君子之審富貴而安貧賤也、如此。」

(十二) 『論衡』問孔第二十八。原文は次の通り。「貧賤何故、當言得之。顧當言貧與賤、是人之所惡也、不以其道去之、則不去也。當言去、不當言得。」(四部叢刊「明、通津草堂本」による)

(十三) 原文は次の通り。「孔曰、不以其道得富貴、則仁者不處。」「時有否泰。故君子履道而反貧賤。此則不以其道得之、雖是人之所惡、不可違而去之。」

(十四) 原文は次の通り。「得富貴者當以仁。不以仁得之、仁者不居。」「得貧賤者當以仁。不以仁得之、仁者不去也。」『唐寫本論語鄭氏注及其研究』(王素編著 文物出版社 一九九一年)ならびに『唐抄本鄭氏注論語集成』(金谷治編 平凡社 昭和五十三年) 参照。

(十五) 原文は次の通り。「所謂道者即仁也」(『論語古義』)

(十六) 全釋漢文體系Ⅰ『論語』(平岡武夫 集英社) 一〇七頁。

(十七) 原文は次の通り。「蓋不以其道得之、不處也、此言得富貴之道、即仁也。不以其道得之、不去也、此言得貧賤之道、即不仁也。」(『論語微』)

(十八) 例えば中國においては、楊伯峻『論語譯注』(中華書局)では「其道」は「正當的方法」と譯し、「貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。」の「得之」は「去之」に改めるべきだとしている。また、金良年『論語譯注』(上海古籍出版)では、「其道」は「正當的手段」、「得之」は「達到所欲或所惡的目的」と注している。

(十九) 原文は次の通り。「本立而道生者、李賢後漢郎顛傳注、立猶定也。道者、人所由行之路。事物之理、皆人所由行、故亦曰道。漢書董仲舒傳、道者、所繇通於治之路也。是也。」

(二十) 「以上所列、乃試依孔子之言論、「以推辨孔子之『道』」當指『德行』或包括『德行』而言。」「以上所列、乃試依孔子弟子(如…有子、曾子)所言之『道』豫以推辨…亦均多指『德行』而言。」胡志奎前掲書二一九頁

(二十一) 『論語注疏』解經序「序解」の「疏」に「以其口相傳授、故經焚書而獨存也。」とある。また貝塚茂樹「論語の成立」『東方學』第一號(『貝塚茂樹著作集』第五卷所收)など参照。

(二十二) 古注は「孔安國曰、惡乎成名者、不得成名爲君子也。」、新注は「言君子所以爲君子、以其仁也。」

(二十三) 原文は次の通り。「言將至死不聞世之有道。」

(二十四) 原文は次の通り。「道者事物當然之理、苟得聞之、則生順死安、無復遺恨矣。朝夕所以甚言其時之近。」

(二十五) 原文は次の通り。「此爲託老衰或權微恙而不肯爲學者發。」(『論語古義』)

(二十六) 原文は次の通り。「此章言用其力於仁者也。朝夕二字、又與前章用力其義相符。故編在於此也。言人或

有於道起必行之念、而曰如朝聞之、則即日必行之矣、雖或因至以其勞疲而夕死、吾亦不顧、而以冀進取之者矣。如若此則始可謂志於仁也矣。」(『論語釋解』)

(二十七) 原文は次の通り。「詳文意、似于晚學之人有來入門者、問日暮途遠猶可到乎、而夫子答之云爾者矣。晉

周處晚折節、詣陸機門、機引此言誘之、可謂善喻矣。(『論語私說』)

(二十八) 原文は「夫道者人之所以爲人之道也。」

(二十九) 圖版を見ると、鄭注は「言臺子渴道、无有醉飽之心、死而後已也。」となっている。活字に起こした

『唐寫本論語鄭氏注及其研究』では「臺」を誤字と見たようで「君」に直しており、金谷治編『唐抄本鄭氏注論語集成』では書き下し文には「君」の横に「？」が付けられている。

(三十) 「可」とは「僅可而有所未盡之詞」(『學生字典』〈支那文を讀む爲の漢字典〉「上海商務印書館 中華民國四十五年」)により、「矣」については、「表示十分肯定的語氣、強調某種情況發生、出現的必然性。可譯爲了、或不譯出。」(『古代漢語虛詞詞典』中國社會科學院語言研究所古代漢語研究室編・商務印書館出版)に

よつて譯出した。

(三十一) 『論語』の篇末に疑わしい章があることはしばしば述べられている。崔述の「洙泗考信録」「論語餘説」などがその代表的なものである。